

看取り介護への取り組みについて

特別養護老人ホーム 箕望荘

施設概要

平成12年4月 開設

入所定員：50名

平均介護度：4.14（H25.9現在）

平均年齢：87.8歳

男女比：男性13名 女性37名

平均入所年数：3.8年



開設時から平成18年までの看取りについて

開設時は看取り体制として明文化されたものではなく、利用者の状態に応じて対応していた。

対応例として

- ・ 訪室する回数を増やす。
- ・ ケースへの記録。
- ・ 家族、主治医への状態報告。
- ・ 看護職員主体の看取り
- ・ 亡くなられた後のケアと送り出し。など

看取りについて振返りもなく次に活かすことのないケアを繰り返していた。

重度化加算と看取り加算の創設

平成18年の介護保険法一部改正により、特養における看取り介護加算と重度化対応加算が創設されました。この改正によって特養における看取りを行う体制の整備が求められることとなる。

加算が創設される前からの『看取り介護』に対する評価として加算要件が明示され特養にて看取りを行っていくという方向性がより強くなっていき、箕望荘でも看取り体制の構築を図っていくこととなる。

看取り介護体制って何？

看取りケア体制づくりの準備として

主治医より生死感について講義を受ける。

特養職員全員で看取ることへの思いを、話し合う。

看取り指針を作成し、職員全員で理解する。

各職種の役割について理解する。

箕望荘での看取りかた（概要）

- ①家族への状態報告とカンファレンス参加への促し。
- ②家族、主治医、各職種参加してのカンファレンス開催。
- ③家族の意向確認。
- ④看取りケアプランの説明。
- ⑤看取り介護開始。
- ⑥看取りの状況について、家族へ報告。
- ⑦永眠。
- ⑧死後のケア。
- ⑨お見送り。
- ⑩看取り後のカンファレンス開催。



職員の葛藤

看取りのタイミング

訪室のタイミング

点滴の継続有無について

死を目の前で経験すること

家族の葛藤

施設 or 病院 ?

家族それぞれの思い

看取り介護への取組による職員の変化

職員間・家族と職員間が共通の認識を持つことができるようになった。

訪室の度に、ご家族との会話も増えグッと距離感が近くなり家族との信頼関係が深くなった。

看取りケアを多く経験することで、職員の不安もなくなり本人・ご家族のご希望に添うよう柔軟な対応ができる気持ちの余裕が出てきた。

最期の時をご家族に見送ってほしい。誰かが最期の時を見届ける。という考えのもと、少しの体調の変化も記録に残すことでご本人の状態を職員間で情報共有できるようになった。

死後のケアの変化について

湯灌（ゆかん）の提供

*湯灌とは、葬儀に際し遺体を入浴させ洗浄すること。（ウイキペディアより引用）



今後の課題

終末期をどう捉えるか、ご家族によっていろいろな考え方があり、ご家族にとって何がベストなのかわからない状況で考えが錯綜される場面が多くある。

看取りに関わる全職員がケアに対する理解とチームワークで成り立つケアと感じている。

専門職として、ご本人様やご家族の思いをどれだけ汲み取って全職員で対応していけるかが、今後の課題である。